日赤図書館雑誌　2003;10(1):56-58

研修会特集　事例報告

院内医学雑誌編集作業に関わって

野口　通世

Ⅰ. はじめに

当院は地域の中核病院として価値ある急性期病院を目指し、ここ数年病院改革に取り組んできました。その結果、現在は臨床研修病院、地域医療支援病院、国指定の救命救急センター、急性期特定入院加算の施設基準取得病院になりました。また全国初の試みとして、平成 14 年 4 月から小児科医師 7 名の２交代制による小児救急 24 時間体制を開始しました。日本医療機能評価機構の認定と、全国で初のＣＡＰ（米国病理学会）の認定を得ています。

筆者は医療情報課広報学術係に所属し、図書室業務と広報関係を担当しています。（1）広報誌並びに医学雑誌の発行に関すること、（2）図書・文献・資料等の管理閲覧に関すること、（3）学術活動への支援に関すること、（4）その他情報発信に関することが主な業務です。

Ⅱ. 院内医学雑誌の発行まで

「病院が医療の将来の発展に対する強い使命感を持ち、医療行為の経験を客観的に記録・集積し、更に分析し常に情報化して発信していくために病院医学雑誌を発行することが非常に重要な意味を持つ。」という院長の方針に基づき院内医学雑誌発行が決定されました。同時に雑誌の基本的構想も打ち出されました。欧米の病院医学雑誌の思考と形態を参考に新しく、楽しく、読みやすい雑誌にする、医学雑誌としての基準は守る、医学術が主であるが、病院業務全般（各種能別）にわたる幅広い雑誌とする、病院各部門の活動状態を掲載するというものでした。

院内医学雑誌編集委員会は平成 7 年 5 月に発足しました。委員は医局、各部署から 1 名ずつ計 19 名を選任し、責任者として原稿提出の把握、チェック等を担当しています。

第 1 回編集委員会では委員の役割、雑誌サイズ、装丁、論文募集、編集作業の日程について決定しました。第２回目では表紙のレイアウト（タイトル、目次）、論文、剖検記録、各科業績、投稿規程等の掲載内容、ISSN の申請手続きをすることを決定しました。

Ⅲ. 院内医学雑誌について

当院の医学雑誌の表紙は病院カラーのブルーで、大きさは変形Ａ４版です。これは雑誌を並べたときに他誌と区別がつくよう、大きさを少し小さくしています。また、欲しい論文をすぐに探せるよう表紙に目次を掲載しています。編集委員長が原著、症例、臨床報告等に区分し、順番を付けます。

医学雑誌の特徴として、（1）全ての診療科が投稿出来るようにする、（2）院内各部門、看護部、コ・メディカル等も投稿する、（3）院外関連施設（ひのみね整肢医療センター、血液センター）にも投稿を依頼する、（4）広告を掲載、（5）英語の抄録を掲載すること等があげられます。

NOGUCHI　Michiyo
徳島赤十字病院　図書室
noguchi@tokushima-med.jrc.or.jp

これまでに第 8 号まで発行してきましたが、論文掲載数は 1 号が 24 件、2 号は 29 件、3 号は 31 件、4 号は 30 件、5 号は 32 件、6 号は 33 件、7 号は 34 件、8 号は 35 件と他病院の院内雑誌に比べて論文数が多いと思います。当院ではこの雑誌を若い医師の研究発表の場として、出来るだけ全ての診療科から投稿してもらうように依頼しています。診療科によっては医師 1 名のところもありますが、ほとんどが協力的です。また徳島県には赤十字関連施設がたくさんあり、昨年初めてひのみね整肢医療センターからの投稿がありました。医師だけでなく、看護師、コ・メディカルからも毎年多数の投稿があります。

Ⅳ. 編集作業日程について

編集作業日程は、以下の通りです。7 月に編集委員会を開催し、その決定した内容に基づき、原稿募集を院内、院外の赤十字関連施設に配布します。9 月末には各委員がおおよその論文数を把握し、10 月末までに投稿者名、題名、抄録を提出してもらいます。11 月初めに印刷業者、抄録の英訳業者に見積もりを依頼します。費用は病院負担です。診療科によって好評な業者が違うため英訳業者は 3 回変更しました。業者に英訳を依頼しても、最終の手直しは自分で行います。昨年の見積り額は、印刷製本代が約 210 万円、英訳料金は 18 万円、雑誌の発送料金を加え医学雑誌発行の経費は約 235 万円です。11 月中頃から論文の原稿、フロッピーディスク（FD）、写真等が揃っている原稿から順に業者に渡します。12 月に入ると各科の業績を提出してもらいます。1 月中頃には、32 業者に広告依頼を発送します。製薬業者が 27 社、医療機器業者が 5 社で、広告依頼は、薬剤部長や問屋に依頼し、掲載は受付順とします。掲載料は 2 万円です。2 月末にはすべての論文、業績、剖検件数等の校正が終了し、最終チェックを編集委員 5 名程度で行います。

毎年、3 月 25 日を出来上がり予定にしています。初めの頃は 3 月末に出来上がりとしていましたが、転勤する先生方にも手渡せるようにと早くしました。投稿者には別刷り 30 部を無料で配布しています。

Ⅴ. 編集（校正）作業について

論文は、各診療科、部署の部長等の校閲がすんだ原稿を担当の編集委員がチェックし、事務局の筆者のところに原稿と FD（MO）で提出となります。

昨年、論文の書き方ガイドライン、チェックリスト（図 1）を作成し、投稿者に渡しています。

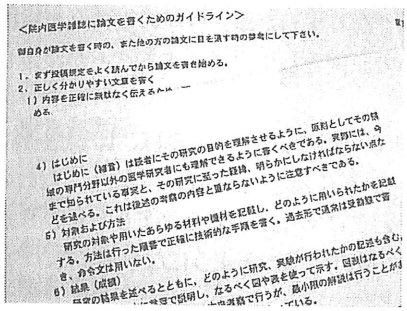

図 1　院内医学雑誌に論文を書くためのガイドライン

印刷業者には原稿とＦＤの両方を渡します。スライドの場合はできるだけ原本に近い状態で渡します。もしＦＤで文字や表が判読できない場合があれば、プリント打ち出しを参考にします。最初の校正は 1 週間から 10 日くらいで返ってきます。返ってきた原稿はまず筆者がチェックします。文献の記載形式を当院の投稿規定に合わせる、図表の位置や大きさ、標題の英語を日本語に変換する等、基本的な部分をチェックしてから本人に返します。図 2 のように封筒

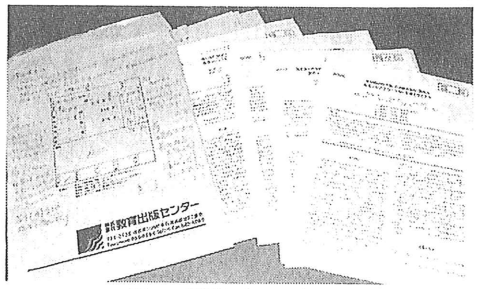

図 2　原稿依頼用封筒

の表に筆者が編集委員として気が付いたことやお願い、校正提出期限等を記載します。

これを始めたのは医師に直接渡すことが出来ない場合が多いため、初めて投稿された人に当院の投稿規程の様式にあわせてもらうため、また看護師やコ・メディカルは論文を書くという機会が少ないため論文の書き方がまちまちでありコメントが多くメモ書きでは十分伝わらないためです。発行を重ねるうちに印刷業者も先に直してくれるようになりましたが、表や図、写真の大きさや位置はまだまだ手直しが必要です。最近はカラーの表や図を載せて欲しいとの依頼が多くなりましたが、今年の委員会で組織等を除いて原則として白黒にすることが決定しました。

図 3 の組版進行予定表は、印刷業者にお願いして 3 年前から利用しています。だれの原稿が今どこにあるか、もう終了したか、ＦＤは返したかがすぐ分かるようになりました。

図3　組版　進行予定表

校正は 1 回と規定にはありますが、ほとんどの論文は 3 回くらい校正しています。論文だけでなく巻頭言、各診療科の業績、剖検報告、症例検討会の報告、編集後記等、全ての原稿は、業者から返ってきたら、まず筆者がチェックします。その後原稿提出先に確認を取ります。そして全ての校正が終わったところで、最初から最後まで約 180 ページを通しで５名の委員がチェックします。それまで個々の論文を何回もチェックしていても、5 人から何箇所も訂正が入ります。それを最終的にひとつにまとめて記載し業者に返します。この作業も大変時間がかかります。後は印刷が出来上がってくるのを待つだけです。

医学雑誌の第１号は450部の印刷でしたが、毎年増え、今年は 750 部印刷しました。院内では全医師、医師以外の投稿者、各部署、編集委員に配布し、院外は全国赤十字病院、赤十字関連施設、国立国会図書館、県内図書館、医師会、医学雑誌を寄贈して下さっている病院、各医局から依頼のあった病院・施設、病診連携関連医院等 750 部をすべて送付します。

当院のもう一つの特徴として病診連携強化のため、平成 12 年から県内の病医院、診療所等への情報提供に医学雑誌を配布していることがあげられます。

Ⅵ. 終わりに

今後、医学雑誌の編集作業に関わる時、広報学術係の役割として、（1）文献検索を行い、的確なデータを提供する（2）スライド、資料作成を支援する（3）院内症例のエビデンスとして後で利用できるようにする（4）他院、他誌との比較をする（5）地域医療連携のため情報提供に活用することが重要だと考えています。

また当院が世界に通用する医療を目指して、医療の質を高める努力をした結果を、診療に関わった全ての職員の記録として収集し、情報化し、発信していくため、これからも編集作業に関わって行きたいと思っています。

この発表のため編集作業の見直しをしていく中でいくつかの課題も見えてきました。それも大きな収穫であり、この機会を与えてくださった皆様に心から感謝しています。